

「賞味期限切れのウエハース」

岩手県立一関第一高等学校 三年

岩渕 咲枝

「大学生になるんだから、捨てていきなさいよ、それ。かさばるし、賞味期限半年も前じゃないの」

引越しの荷造りをしている時、母に咎められた。目線の先には段ボールの中にある大量のウエハース。ただのウエハースではない。アニメ「ゆめばら」の第二シーズン版のトレーディングカード入りウエハースだ。一箱で全種類のカードが揃うのだが、見る用、飾る用、保存用の三箱購入してある。見る用と飾る用は開封し、ウエハースも食べたのだが、保存用は新品未開封のままにしている。

「嫌。大事なもののなの、私にとって。日焼けしないようにしてるし、埃被らないようにもしてまし」

母はまだぶつくさ言っていたような気もしたが、私は荷造りに戻った。ホームセンターで買ってきた梱包材でウエハースをくるみ、段ボールにそつと入れる。隙間には設定集とポストカードセットを入れる。隙間には設定集とポストカードセットを入れる。ガムテープで封をする。母は呆れたような目で私が荷造りを見ているのを見ていた。段ボールに油性ペンで「ゆめばら グッズ その5」と書く。

「よし、次はフィギュアを片付けよう」

一息つく間もなく、私は次の作業にとりかかった。

「ゆめばら」とは、日本のコンテンツ産業を代表する作品である。原作はリズムゲームで、ゲームセンターに置かれた筐体には順番待ちの列ができることもしばしばあった。ストーリー性も評価され、アニメ化、漫画化もされている。グッズ展開も豊富だし、この間リリースされたスマートフォン向けのゲームアプリはあつと言う間に五百万ダウンロードを突破した。そして今年夏には劇場版も公開される予定だ。

私は中学生の時にこのゲームにはまった。中高の六年間はまさに「ゆめばら」三昧と言っても過言ではない。毎週末、ゲームセンターに通った。どこに行っても売り切れのグッズを買うために、隣の県ま

で電車で行った。ゆめばらが好きな友達四人でグループを作り、情報交換をして毎日語り合った。

「ゆめばら」は、いつでも私を楽しませてくれる。これまでも、きっとこれからも。

引越しも終わり、大学生活が始まった。不安なことは色々あるが、とりあえず友人の佳苗と同じ進学先なのでさほど怖くはない。佳苗もゆめばらが好きで、それをきっかけに仲良くなった。これから大学で佳苗と合流して、サークル見学に行く予定だ。かけてあったリュックサックにパンフレットと筆記用具、スマホと財布を入れ、チャックを閉めた。

「よし、忘れ物もないし、準備完了かな」

そう思ったが、黒無地のリュックサックについているピンクの派手な缶バッジが少し悪目立ちしているような気がした。「漫画版ゆめばら公式ピンオフ作品 初回限定特装版」付録のプチキャラが描かれたものだ。買って以来お気に入り、保護カバーを利用してがらずにつけていた。が、大学最初のオリエンテーションにつけていくのはいかがなものだろうか。TPOをわきまえることを意識し、リュックサックから缶バッジを外した。久々に見た、本当に黒無地のリュックサック。どこか寂しげな雰囲気だったが、気にせず背負って出かけた。

「未歩、お待たせ」

佳苗が待ち合わせの学長像のところに来た。高校のころとは打って変わって、このごろめつきりお洒落になった。フレアスカートがよく似合っている。

「全然待ってないよ！ こっちこそごめんね、サークル見学つきあわせちゃって」

四月、桜の植えられた校地内には、花卉が風に吹かれて飛んでいる。

「いいのいいの、私だって一人だったし」

「そっか。ねえ佳苗、何か気になってるサークルあるの？」

新入生向けのパンフレットを片手に聞いた。それから二人でいくつかサークルを見学し、お互い演劇サークルに入ることになった。

大学生活はそこそ楽しい。高校の時より講義は

面白いし、バイト先の同僚も優しい。サークルのメンバーとも仲良くなり、六月の定期公演会に向けて日々練習に励んでいる。

「ゆめばら グッズ」の段ボールは、一つ開けたきりで、他はそのままになっていた。

新生活にも慣れたころ、スマホの通知音で目が覚めた。受注生産限定・五周年記念ゆめばら祭で買って以来お気に入りの掛け時計にふと目をやると、午前十時十五分。きつと母からに違いない。ゴールデンウィークくらい実家に顔を出しなさい、と言われるのだろう。引越したばかりだし、旅費だっとかさむじやないか、と心の中でぶつくさ言いながら液晶画面に目を向ける。

『ついに新曲、クリアできた!』

高校時代、仲良し四人組のグループチャットの通知だった。友里からだ。

『おめ。やったじゃん、ここ最近閉店まで入り浸ってたもんね』

『ひーん 軽く50クレは溶かしちゃったよお』
……ゆめばらに新曲、追加されてたっけ? なんのことだろう。公式サイトを開いてみる。新曲は一週間も前に追加されていた。嘘だろ、この私が、一週間も公式サイトをチェックしていなかったのか。いや、一週間どころではない。最後にこのサイトを開いたのはいつだっけ。ゲームセンターに行ったのはいつだっけ。……ゆめばらのことを考えたのは、いつだっけ。背中をつうつと、冷たい汗が流れていた。

『あたしにゃ一生無理だわ、サビ前でいつつも落ちるもん』

と、遥香が返信していた。

「あー、ごめん。最近忙しくて全然ゲーセン行けなかったから未プレイだ」

そう返信した。言い訳だった。本当はそんなに忙しくなんてない。今日だって真昼間まで惰眠をむさぼっている。そういえば最近、全然ゆめばらしてないな。

「久々にゲーセン、行かなきゃ」

一人暮らしの六畳間、誰ともなしに呟いた。部屋

着から着替え、顔を洗う。髪を梳かして一つにまとめ、ペットボトルのジュースと財布、スマホだけをリュックサックにいれる。スニーカーに足をつっこみ、家を後にした。

「いつてきまーす」

私の声が、無人の六畳二間に響き渡った。

煙草の匂い、暗めの照明。埃とエアコンのにおい。それとは対照的なゲームの電飾。ゲームセンターはどこも似たような雰囲気だ。クレイゲームやカードゲームを横目に見ながら、ゲームセンターの奥へと足を運ぶ。

「ゆめばら」には順番待ちの列ができていた。慣れた手つきで名簿にプレイヤー名を書いて列に並ぶ。十分ほどして私の番が回ってきた。新曲の前に、まずは慣れた曲をプレイしてリハビリをしておく。肩慣らしが終わったので、二回目をするためにまた名簿を書くとした。

「あ、すいません!」

知らない人とペンを同時に取りそうになり、指先が触れ合ってしまった。西山高校剣道部、と明朝体ででかかど書かれたTシャツを着ていた。ふと周囲を見渡すと、並んでいる人は部活帰りのような恰好だったり、背丈や顔つきが幼かったりして、中高生ばかりのように見える。よくよく思い返してみると、なるほど年上でゆめばらをやっていた人は少なかったイメージがある。子供にせがまれてやってきた親子連れ、クレイゲームを楽しむカップル、プリクラを撮る女子グループ。そもそもゲームセンターにしているのはそんな人が大半で、おひとりさまなのは私か、スロットのメダルゲームをしているおじさんくらいだ。

もしや、私だけ浮いていないか? 急にゲームセンターの中の空気が重く感じられた。いやに気がくさくさして、結局一時間もいられなかった。手持ち無沙汰のまま近くのラーメン屋でチャーシュー麺を啜り、予定よりだいぶ早く家に帰った。

『ごめん。私グループ抜けてもいい?』

数日後、佳苗からのメッセージが来た。

『どうしたの急に。まさかゆめばら辞める、とか？ w』

友里が冗談めかした返信をしていた。

『うん、大体そんな感じ』

佳苗の返事に、正直驚きが隠せなかった。仲良し四人のグループチャット、共通項はゆめばらだけ。それなのに六年間、ずっと仲がいいメンバー。まさか、このグループを抜けたいだなんて。ゆめばらを辞めるだなんて。ありえない。とりあえず、シヨックを表すスタンプを送る。

『え、なんで？ 彼氏でも出来たん？』

そう思ったのは私だけではないらしく、遥香がチャットで聞いていた。

『なんとなく、かな。彼氏は一生できませーん』

(笑)』

佳苗は茶化しつつも、辞めたいという意志は変えないようだ。とはいえ謎は残る。最近彼女になにか変化があったかと言われたら、そうでもない。ゆめばらを辞める理由がわからない。それ以上誰かが言及することもなく、うやむやのまま時が過ぎた。

「……私はゆめばらが好き。そうでしょ？」

自分に向かって問う。そうだ、少なくとも私はゆめばらが好きなんだ。ちよつと新生活に慣れるのに時間が必要で、その分向かい合えなかっただけ。佳苗だって落ち着いたら気を変えてくれる。そう言い聞かせた。

「オタクたるもの、まずはグッズを飾らなくては！」

新生活が落ち着いたとはいえ、段ボールを全て空けられたわけではない。部屋の整理整頓も兼ねて、引っ越したての時にその1だけ開けてそれきりの「ゆめばらグッズ」の開封式をすることにした。

まずは「その2」の段ボールを開ける。ポスターやぬいぐるみ、キーホルダーなどがぎっしり入っている。お気に入りのポスターのうち、飾る用のものを一枚選ぶ。玄関、黒いドアにはる。ぬいぐるみは陰干しした後、ベッドに乗せる。キーホルダーは使うものを手元に残してあとはしまう。よし、だいぶ私らしい部屋になってきた。「その3」にはアニメ版のブルーレイとDVD。ブルーレイ再生機は家に

ないのに、特典のレプリカサイン入りアニメ台本欲しさにお年玉をはたいて買った。本棚にそれらを並べていく。もちろん、日焼け防止のカーテンも忘れずにセット。

「よし、もう半分」

その4のダンボールを空ける。プロマイドやテレビカに混じって二年前のスケジュール帳が出てきた。懐かしい。手にとってばらばらめくってみた。

「……こんなにぎっしり、予定詰め込めたんだな、私」

アニメの放送時間、新曲発表の日付、グッズ販売の予定。色とりどりのペンで、ぎっしりと予定が書かれていた。「好き」という熱意に突き動かされたからこそできた代物だ。今もスケジュール帳をつけてはいるが、必要最低限のことをメモしているのみだ。きつともう、今となってはこんなにびっしり書き込めない。それでも、できることをしていこう、と思った。スマホの電源をつけて、公式サイトを開く。

「ほらほら、あるよ新情報」

『劇場版ゆめばら公開記念！ コレクターズBOX

X(仮) 制作決定！ 絶賛予約受付中 九月中旬販売予定』

予約特設サイトを開く。劇場版ブルーレイ、限定フィギュア、歴代グッズ図鑑、劇場版の小ネタ解説、原画公開、キャストインタビュー、その他諸々盛りだくさんだ。お値段税抜き29800円。

29800円か。バイトもしているし、仕送りもあるから決して買えない額ではない。それでも頭を悩ませるには十分な値段だ。

「……まだ予約期間あるしな」

そう言っただけでスマホの画面をスクロールした。

「お」

明日七時から特番だ。必要最低限の情報しか書いていなかったスケジュール帳に、赤ペンで「7・00」特番」と書き込む。それから公式サイトをくまなく調べ、スケジュール帳に移す作業を続けた。

「え、もう外真っ暗！」

時間を忘れて熱中していた。こんな経験は久しぶりだ。

「やればできんじゃん、私」

整理整頓が進んだ、とはとても言えないが、こんなに満ち足りた気分になれたのだ。今日はそれよしとしようじゃないか。散らかった部屋を後にして、夕飯の準備を始めた。

『夏、劇場版この四人で見にいかない？ オタ話に花、咲かせようぜ（キリッ）』

友里がグループチャットでみんなを誘った。

『私抜きで見てきていいよ。今のシリーズ追えないから』

佳苗が遠まわしに断ってきた。何でこんなことを言うんだろう。あの頃のままの情熱を傾けられないとしても、映画くらい見たって良いのに。

『映画もう見たから言うけど、追えてなくても大丈夫、見てみたらスゴイって分かるよ！ みんなお盆には帰省してくるでしょ、そのとき一緒に見に行こうよ』

『そうそう、私もみんなと見たいかな。プチ同窓会も兼ねてさ。未歩はどう？』

遥香の問いに、少し迷ったが答えた。

『うーん、行こうかな。せっかくだし』

正直、私だつて存分に楽しめる自信があるわけじゃない。それでも、行かなければ。せっかくこの劇場版のために、しばらく見ていなかったアニメも見返した。積ん読状態だった漫画も読み込んだ。今までの努力を無下にするわけにはいかない。

『佳苗も来ようよ！ もう滅多に集まれることもないし、四人そろっていきたいじゃん』

遥香が提案する。賛成賛成、と私と友里が話に乗った。

『絶対見たらまたゆめばらのこと好きになれるから、むしろ見て欲しいんだよね』

友里がそう言っていた。そうか、また好きになれる、か。最近以前ほどの熱を上げられなくなっていたけれど、映画を見たらまた、あの時みたいにゆめばらを好きになれるかもしれない。淡い期待が、心の中で芽生えた。

「ねえ佳苗、どうしてゆめばら辞めたいの」

翌日、学食と一緒に昼食をとっているとき、恐る恐る佳苗に聞いた。

「未歩だつて、ゆめばら全然してないって言ったじゃない。理由は一緒よ、たぶん」

デザートのプチパフェの一番上、飾りのウエハースをかじってから彼女は答えた。

「一緒って言われても、私理由とかないんだけど」

「私も。なんとなく、って言ったじゃない。強いて言うなら、グッズ買うお金で美味しいもの食べたり、アニメ追う時間で友達と遊んだりしたいだけ」

彼女はチョコレート色に染めた髪の毛を、指でくるくるしながら答えた。

「え、そんな理由で辞めちゃうの」

一瞬佳苗が嘘をついているのではないかと思つたが、表情から察するにそうではないらしい。あれだけ情熱を傾けてきたゆめばらを、そんな簡単にやめられるだなんて信じられない。

「逆に聞くけどさ、今の私にゆめばらする理由ってあるの？ 辞めない理由ってある？」

怒つたように聞いてきた。私にはすぐ答えを見つけないことができなかった。

「……別に理由なんて、なくてもよくない。好き、だったんですよ」

コンソメスープの残り半分、玉ねぎと人参をむだにくるくるかき混ぜる。

「今はそんなに好きじゃないんだから、もう辞めたつてよくないかな。それより未歩、ロシア語のレポートもうやった？ 見せてよ」

あからさまに佳苗が話題を変えた。私もこれ以上は言及できず、コンソメスープを飲み干した。底にたまつた黒コショウが喉を刺激し、むせてしまった。

八月十三日、日曜日。天気、快晴。映画館集合が一時、映画開始が一時半。もはやみんなで集まるために映画を見るのか、映画を見るためにみんなで集まるのかわからないスケジュール。プチ同窓会、なんてただの口実だ。五分前には全員が映画館前に集まっていた。フードやドリンクを各々頼み、チケットを買って指定された部屋に向かった。

「こちら入場特典のポストカードになります」

チケットを店員に渡して、特典を貰った。

「よし、公開四週目のポスカも無事ゲット！」

友里がガッツポーズをしていた。

「みんな劇場版見るの何回目？」

ふと気になって聞いてみた。

「四回目。週替わりのポストカード、全制覇したかったんだよね」

と、遥香。週ごとに違うヒロインのポストカードがもらえるらしい。

「えー、忘れたわ。えっと、公開初日に見に行って、その時はポスカもらえなかったから二軒目行って、それから二週目で二枚目のポスカでしょ。アニメサークルのメンバーみんなで見に行って、三週目も見ただから六回目かな！」

「やっぱ友里はレベチだわ、私なんてこれが一回目だもん」

そんな私たちの会話を、佳苗は遠巻きに見ていた。

作画は業界最高レベル。初見でも楽しめ、古参のファンをくすりと笑わせるような展開。「ゆめばらシリーズ最高傑作、と言われるにふさわしい映画だった。

それなのに、私の心は以前ほどは動かされなかった。明け透けて見える製作陣の意図。お決まりの展開。白々しさを覚えた。無感動だった、と言ってもいい。

そう思った私と対照的だったのは、ゆめばらのファンたちだ。近くの席にいた女の子は公式応援グッズを持って、食い入るようにスクリーンを見つめていた。友里は六回目の視聴だというのに嗚咽を漏らして泣いていた。それなのに、私は涙の一滴も出さず上映時間があつと言う間であると感ずることもなかった。そんな自分がただただ情けなかった。

映画を見た後、友里と遥香は熱く語らないながらグッズの売店でグッズを見ていた。私はなにか気おくれしてしまい、二人の輪に入れないでいた。

「ぶっちゃけ映画、どうだった？」

そんな私の心情を、知ってか知らずか佳苗が聞いてきた。

「すごかったと思う、製作陣の愛を感じた」

嘘はついてない。愛がなければ、あのクオリティには絶対にならない。ゆめばらを曲がりなりにも長年見てきた者としての、純粹な感情だ。

「もう一回見たいと思う？」

佳苗はどこか遠くを見ながら質問してきた。

「……そこまでではない、かな」

きっと、以前の私なら何回も映画を見ただろう。それでも、今の私にはこう答えることしかできなかった。

「アハハ、未歩もか。私もそう思うよ」

「それはさておき、友里と遥香ってスゴイよね、学校にバイト、色々あるだろうに、ゆめばらにハマって。私なんてもうそんな体力ないよ」

「そうかな？ 私は別にそう思わないけど。友里だって遥香だって好きで追ってるわけじゃん、ゆめばら。それはそれでいいと思うけど、現実問題いつまでもゆめばらばかり、構ってられないでしょ」

「そうだけど、ゆめばらは私らにとつての青春みたいなもんじゃない？ なんか勿体ない」

水掛け論だと分かっているけど、反論せずにはいらなかった。それでも佳苗は表情一つ崩さず答えた。「だからって、無理して好きでい続けなきゃいけない理由にはならないと思うよ」

そう言いながら、ポップコーンの空き容器に、入場者記念のポストカードを入れ、ごみ収集をしているスタッフに渡した。

「残念かもしれないけど、これが大人になるってことなんだよね」

憑き物が落ちたような顔で、佳苗は呟いた。私の胸の中に、たしかに黒々としたもやが広がるのを感じた。そしてこのもやを吸い尽くし、自分の糧にしていくことが正しいことなのだと、自分の理性がささやいていた。

その日の晩、佳苗はグループチャットを抜けた。

ダメだ。何がダメなのかは分からないが、とにかくこのままではいけない。そう思いながらも何もできず、一日、また一日と時は過ぎていった。

『コレクターズBOX届いた！ みんな買った？ 受注限定だけどまだ通販サイトにちよつと在庫あるから是非』

そんなある日、友里からコレクターズBOXの画像とともにメッセージが届いた。友里、買ったんだ。通販サイトを見てみると、新品在庫あり、とあった。29800円。買うか、買わないか。今ならまだ間に合う。買わなきゃいけない、買わなきゃファン失格だ。義務感が私を駆り立てる。今すぐ買う、のボタンを押す。個人情報とクレジットカード番号を入力する。

購入確認 本当に購入しますか？

はい いいえ

本当に、本当に買うのか。何も感じられなかった映画のブルーレイとグッズに三万。いや、こう考えるんだ。私に青春をくれた公式と制作陣に、三万のお布施。でも、買ったところで映画、見返すか？ 資料集、本当に欲しいのか？ だけど、往年のファンとしては手に入れる義務が、使命があるんじゃないか？ でも、だけど、でも――

悩んだ末に、買えなかった。震える指でいいえを押した。やっぱり私はもうダメだ。大人になるってこういうことか。脱力感と安堵に襲われ、へなへなと座り込んでしまった。アニメ版ゆめばら第二シーン五話のラストシーンの主人公みたいだ、なんて自然と思い返された。以前の私なら、コレクターズボックスを食費を切り詰めてでも買っていただろうなあ、とぼんやり窓の外を眺めながら考えていた。嫌味なほどに鮮やかな夕日が街を照らしている。そろそろ夕飯の支度をしなければいけない。我に返るとほぼ同時にお腹が鳴った。冷蔵庫の中身を思い返す。そろそろ賞味期限が切れる豚肉。特売三割引のカレールー。しなびかけのキュウリ。カレールーとサラダにしよう。そういえば、輸入食品店でちょっといいドレッシングを買っておいでたんだ。今日開けてみよう。スマホを置いてキッチンに立つ。包丁を握る。トントンと小気味いい音を立て具材を切っていく。完成した夕飯は、いつになくおいしかった。

『私もここ、抜けていい？ 本当に最近ゆめばらしてないからさ』

三人だけのグループチャットにコメントを送った。この頃になるとほとんど会話もなくなっていた。

『OK』

無機質な二文字が、画面に表示された。もう友里も遥香も私のことを止めなかった。震える指で、液晶に表示された「退会」の文字をタップした。少し寂しげな風が心の中を吹き抜ける。それでいい、そう思うことにした。自分の判断を正しいと信じることしか、今はできなかった。

その日の夜、「ゆめばら グッズ その5」と書かれたダンボールの箱を空けた。荷造りをした時、何も迷うことなくゆめばらが好きだった時のまま、箱入りのウエハースと設定集、ポストカードがあった。

「大学生になるんだから、捨てていきなさいよ、それ」

荷造りのときの記憶がフラッシュバックする。母は正しかったのだ、と遅ればせながら思う。

戸棚から町指定のゴミ袋を取り出した。幸か不幸か明日は燃えるゴミの日だ。今からなら、朝のゴミ回収に間に合う。燃えるゴミ袋にウエハースを入れるようにした。手が震える。泣きそうになる。かつての私が、それだけはやめてくれ、と必死に私を押しとどめる。私はもう、オタクにも一般人にもなれやしないのか。パッションも持たず、世間とも微妙にずれた感覚を持って生きなければいけないのか。

「これが大人になるってことなんだよ」

佳苗の台詞が脳裏にこびりついて離れない。そうか。私は大人にならなければいけないのか。

どうにもやるせなくて、賞味期限切れのウエハースを一枚、封を開けてかじった。安っぽいチョコレート甘味と、ひどくしけたウエハースの破片で口の中がいっぱいになった。